

兵教大 ○菊澤康子 黒田玲子 戸谷 修

大阪成蹊短大 田中幸恵

目的 高齢化社会にあって、これからの老・若世代間交流のあり方を追求するために、祖父母と孫との交流に焦点をあて、前報まではわが国の小・中・高・大学生を対象に、その交流の実態と意識の把握を試みたが、本報ではわが国における世代間交流の特質をより明らかにするために国際比較を試みた。

方法 1985年1月、米国アイオワ州立大学の1~3年生約200名を対象に留め置き法にてアンケート調査を依頼し、102名(51.5%)より回収した。その結果と前報までに報告したわが国の大学生対象の結果とを比較・検討した。

結果 ①孫・祖父母間の訪問・電話・物のやりとり・手紙のやりとり等の交流は、わが国では「ほとんど交流なし」が過半数を占めて多いのに対して、アイオワ大生の過半数は「少なくとも年1回」は各々の手段を利用して交流を行っており、孫・祖父母間の交流頻度はわが国より多い。②祖父母から学んだこととして「物を大切にすること」、「親切であること」、「生活の知恵」をあげたものは、わが国では各々約2割であったが、アイオワ大生ではいずれも約5割を越えて多い。③祖父母についての楽しい思い出をもつものはわが国では約4割であるが、アイオワ大生では約8割と多く、その思い出の内容もわが国とは異なりバラエティに富んでいる。④老人問題について考えたことのあるものはわが国では約半数であるのに対して、アイオワ大生では約8割を占めて多い。以上より孫と祖父母との交流は全体的にみてアイオワ大生の方がわが国の大学生より多く、個人的相互の結びつきがより強く、老人問題への関心もあるのではないかと考えられる。